



2024年1月25日
第98号

JR 東労組 Yokohama

JR 東労組横浜地本

発行人 助川一実
編集 情宣担当
ホームページ

<http://www.jreu-yokohama1.jp/>



イーハトーブ

1月25日号

根岸線山手駅の西側の丘に根岸外国人墓地がある。この地に眠る人々の墓石には誕生日と命日が刻まれている。その一角に点在する小さな墓石たちを見ると、その命の儚さに言葉を失う。さらに、この場所はかつて、無数の小さな十字架で埋め尽くされていたと噂。

戦後、横浜の大部分は米軍に接收され、本牧や根岸に米軍住宅がつくられ、伊勢佐木町には兵舎が並び、飛行場もつくられた。戦後の混乱の中で生まれた「混血」の嬰兒は生きることが許されず、いつしか根岸外国人墓地に遺棄され、小さな十字架で弔われるようになったという。戦後の混乱がおさまり、米軍が持ち込んだ文化の発信地として本牧が注目を浴びると、「混血」はやがて「ハーフ」と呼ばれ持て囃された。そのような時代に、本牧の米軍はベトナム戦争へ出撃していく。ときの横浜市長、後に日本社会党委員長となる飛鳥田一雄は、「米軍が去った後の横浜」に備え、都市基盤整備の大規模投資を行う一方、ベトナム反戦運動、ノーストックへの戦車搬入を阻止する戦車闘争を支援した。やがて、ベトナム戦争が終わり、本牧の米軍は去った。流行の発信地は東京に移り、これといった特徴もない、東京の一部としての横浜が残された。飛鳥田一雄の描いた横浜は、80年代になってようやく実を結び、今の華々しい観光都市としての横浜が形づくられた。その裏で、戦後の暗い歴史を語っていた根岸外国人墓地の無数の十字架は、隠されるように姿を消した。

横浜に残っていた最後の米軍居住地、根岸住宅地区も間もなく返還される。戦後から続いた横浜の米軍住宅が消え、跡地の活用が課題となっている。

今年も沖縄研修が行われた。戦後横浜が辿ることになったかもしれない歴史が、今の沖縄である。現地を見た皆さんは何を思ったであろうか。米軍と共存することの光と影の部分を見つめ、不公正を是正し、米軍が去った後の沖縄の未来を描くことも、私たちに課せられている使命でもある。

(D・F)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちが外に目を向け、私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。